

# 学生が捉えた統合実習の「看護課題」の構造

## －看護チームで取り組む看護実践と複数患者受け持ちの学び－

三ツ井 圭子, 眞鍋 知子, 藤井 広美, 石塚 睦子, 根本 友見, 塩田 みどり,  
村上 京子, 加藤 さつき  
了徳寺大学・健康科学部看護学科

### 要旨

本研究は、学生が捉えた看護チームで取り組む看護実践と複数患者受け持ちの「看護課題」の構造を明らかにし、統合実習の指導への示唆を得ることである。質的研究手法として質的統合法（KJ法）を用いた。対象は統合実習に参加した81名の最終カンファレンスレポートである。分析の結果、看護実践を【臨機応変な看護】【タイムマネジメントをした上での看護実践】【優先順位や計画立案を行った上での看護実践】が互いに影響して、【質を確保した看護の公平性】を保証すると学んでいた。この看護実践は【チーム連携によるより良い看護実践】により、チームの機能を発揮することで多重課題に対応でき、【チームでの患者の安全確保】もできると捉えていた。さらに【社会に求められる医療や看護】に応える職務責任に基づき、日々の【看護師としての自己研鑽】が必要であると学んでいた。以上のことから統合実習には、タイムマネジメント、優先順位や計画立案、連絡・報告・相談と患者安全の視点に立ってのチームワークの体験を、講義・演習・領域別実習によって積み重ねる授業方略が必要である。

キーワード：看護課題，統合実習，看護実践，看護チーム，複数患者の受け持ち

### Structure of " The Challenges " of integrated nursing practicum students grasp : Learning about nursing practice as a nursing team and taking charge of multiple patients

Keiko Mitsui, Tomoko Manabe, Hiromi Fujii, Mutsuko Ishizuka, Tomomi Nemoto, Midori Shioda,  
Kyoko Murakami, Satsuki Kato  
Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Ryotokuji University

### Abstract

The purpose of this study is to clarify the structure of nursing practice " The Challenges " in working in a nursing team and taking charge of multiple patients as observed by students. And we obtain suggestions for integration practice. The qualitative integration method (The KJ method) was used as a research method. The final conference reports of 81 students who participated in integrated practice were examined.

As a result of the analysis, students learned the following things. Clinical practice of nursing was influenced by variable nursing, clinical practice with time management and clinical practice priorities and planning. The students also learned to ensure fairness of nursing quality ensuring. This nursing practice was based on better nursing practice through team, collaboration and they coped with multiple tasks by demonstrating the function of the team, and they

learned that securing patients' safety in teams. In addition, the students learned that day-to-day self-study as a nurse is necessary based on the job responsibility to respond to medical care and nursing required for society.

Based on the above, in the integrated practical practicum, the lesson strategy of accumulating experiences of teamwork from time management, priorities, planning, communication / reporting, consultation and patient safety perspective through lectures / exercises / clinical nursing practice is necessary.

Keywords : a challenge to nursing practice, integrated nursing practicum, clinical practice,  
nursing team, charge of multiple assignment

## I. はじめに

超高齢社会，疾病構造の変化，国民の意識の変化，医療技術や医学の進歩，医療費削減の政策に伴う在院日数の短縮などの看護を取り巻く背景はより高度化複雑化してきている。加えて，国民の医療安全に対する意識は向上している。看護職には，知的・倫理的側面や，専門職として望まれる高度医療への対応，生活を重視する視点，予防を重視する視点及び看護の発展に必要な資質・能力が求められる<sup>1)</sup>。2016年病院看護実態調査では，新人看護師の離職率は7.8%で2011年より7%台を維持しているものの，依然離職は続いている<sup>2)</sup>。医療現場での新人看護師のヒヤリ・ハットの占める割合の高さ，前述した社会背景により看護職の社会的責任が増大し，多重課題への対応能力といった臨床現場で求められる能力<sup>3)</sup>と看護基礎教育の内容は乖離している。臨床現場では，専門性の高い看護実践能力と業務遂行の能力が求められているが，看護基礎教育においてこの両者を育成するカリキュラムが手薄になっていた。そのため，平成21年に保健師助産師看護師学校養成所指定規則等の一部が改正され，より臨床実践に近い学習内容を強化するよう「看護の実践と統合実習（以下，統合実習）」が始まった<sup>4)</sup>。平成27年度の統合実習において，学生は新しい看護に関する課題（以下，看護課題とする）を見出すと考え，統合実習前後の看護課題を比較した研究を行った。その結果，学生は，統合実習後に看護課題として看護チームで取り組む意味と，複数患者受け持ちでの看護の質の維持向上のために自身がおこなうべきことを見出していた。

チームとは，メンバーの連携と協力により，メンバー各自の持ちうるスキルや経験では解決することのできない課題をクリアするだけの力を生み出すと言われている。看護チームの看護師は24時間看護が絶え間なく看護を実施するために，情報の共有を密に行う手段として勤務隊交代時の申し送りや各勤務帯でのカンファレンスをおこなっている。さらに，勤務中に発生した事案に対して，その時々チームリーダーに報告し，必要時チームリーダーや病棟責任者が相談に乗り，事案を解決する対策の指示を受け解決する行動を取る。看護チームのチームワークには，「チームへの自信」が重要な因子となり，そこには，意見を聞いてくれ，適切ではっきりとして方針を示してくれる上司の存在や，情報交換や相談ができ，助け合え，気持ちが通じる同僚の存在の「上司の支持的行動」「同僚との良好な関係」が影響を与えている<sup>5)</sup>。

一方，井村らの研究では，患者の健康問題に関する目標を達成するために行動している看護師は，患者の健康問題の目標達成に，看護師のチームワークの良さも影響するが，それよりも看護師個人のEmotional Intelligenceの他者と自分の感情の違いから，自分の考えや行動を導くために情報を利用できる社会的能力の高さが影響する<sup>6)</sup>と示された。すなわち，看護師個人の患者を把握する思考や患者の健康問題に関する目標達成を目指す思考が質の高い看護に必要とされている。

看護師は複数の患者を受け持ち，それぞれの患者の日常生活援助や治療・検査の準備や観察・ケアなどを行っている。この多重課題において状況をアセスメントし，優先順位をつけていくことで対処している。

しかし、新人看護師は行為・関わる人の多重課題に加えて、予定か変更する流動的な臨床場面で、限られた時間内に、先々の対処をふまえて判断や行動することが困難であると言われている<sup>7)</sup>。看護師が多重課題に対応していくためには、優先順位をつける判断力や予定変更に対応できるタイムマネジメント力、およびチームに帰属している一人のチームメンバーとして、他のチームメンバーやチームリーダーと協働して行動することで看護の質を維持・向上が目指せる。統合実習で看護実践の実際を学んだ学生が捉えた看護課題を、看護チームで取り組む看護実践と複数患者受け持ちに焦点を当てた構造を明らかにすることは、臨床で求められる看護実践能力を培う動機につながるため重要であると考えられる。

## Ⅱ. 目的

本研究では統合実習の最終カンファレンス資料から、学生が捉えた看護チームで取り組む看護実践と複数患者受け持ちに関する「看護課題」の構造を明らかにし、統合実習の指導に関する示唆を得る。

## Ⅲ. 研究方法

### 1. 対象

A大学看護学科の4年次に行われた統合実習に参加した学生93名中、研究協力を表明した81名のレポートを研究対象とした。

### 2. 分析方法

質的統合法（KJ法）を用いて以下の手順で分析を行った。臨床現場で行われている看護チームで取り組む看護実践と複数患者受け持ちの看護は密接に関連し、看護実践能力と看護業務遂行能力が混沌と存在しているため、学生が捉えた看護課題を整えていく現状把握の方法として質的統合法（KJ法）を用いる<sup>8)</sup>。

#### 1) ラベル作成

統合実習の最終カンファレンス資料をよく読み、学生が捉えた看護チームで取り組む看護実践と複数患者受け持ちに関する看護課題と定義した「学生が看護学実習を通して、看護専門職として成長する自分自身の現在の問題や看護実践上必要であると自覚した内容」と読み取れる文章を04理論にて一義一文でテキストデータを抽出した。

04理論は「純粹経験」によって得られた情報を対象化して取り出し、データ化する方法であり、学生の学習体験が素直に抽出できる方法である。一つひとつのデータを見て自問自答しながら0番から4番までの番号を付して抽出して要素化し、その上で日本語の文法に則って一文を構成する。0番はシンボルマーク的なもので、表現したいことのエッセンス、1番は名詞的なもの、2番は動詞的なもの、3番は修飾語的なもの、4番は1～3番から漏れ落ち、それらを補足できるようなものである<sup>9)</sup>。04理論の意味の分解・抽出プロセスは表1に示す。図1で示した0番から4番までを構成する意味の構造（意味のダイヤモンドモデル）で、1番から4番までの要素を1単位として、コミュニケーション（問答）を行い、0番を伝え合えるか<sup>10)</sup>、解釈を研究者間で繰り返し討議し、妥当性を確保しながらテキストデータを抽出した。

表 1. 04理論—意味の分解・抽出プロセス

(山浦靖男, 科学的な質的研究のための質的統合法 (KJ法) と考察法の理論と技術. 看護研究. 41 (1), 11-32. 2008.)

0番: キャッチしたことから、どんな感じか? 要するに、一言でいうと。 「〇〇〇 (シンボルマーク的)」な感じ.
1番: それ (0番) は何についていっているのか? 要するに、一言でいうと。 「〇〇〇 (名詞的)」についていっている.
2番: それ (1番) がどうだ、といっているのか? 要するに、一言でいうと。 「〇〇〇 (動詞的)」だと、いっている.
3番: それ (2番) に対してどういう風にどうだ。 または、どのような何 (1番) だといっているのか? 「〇〇〇 (修飾語的)」風に、いっている.
4番: 2番または1番, または3番を補足することはないか? 要するに、一言でいうと。 「〇〇〇」. (最後の4番は複数になりうる)

左回り：意味の分解プロセス      右回り：日本語の意味の構成プロセス

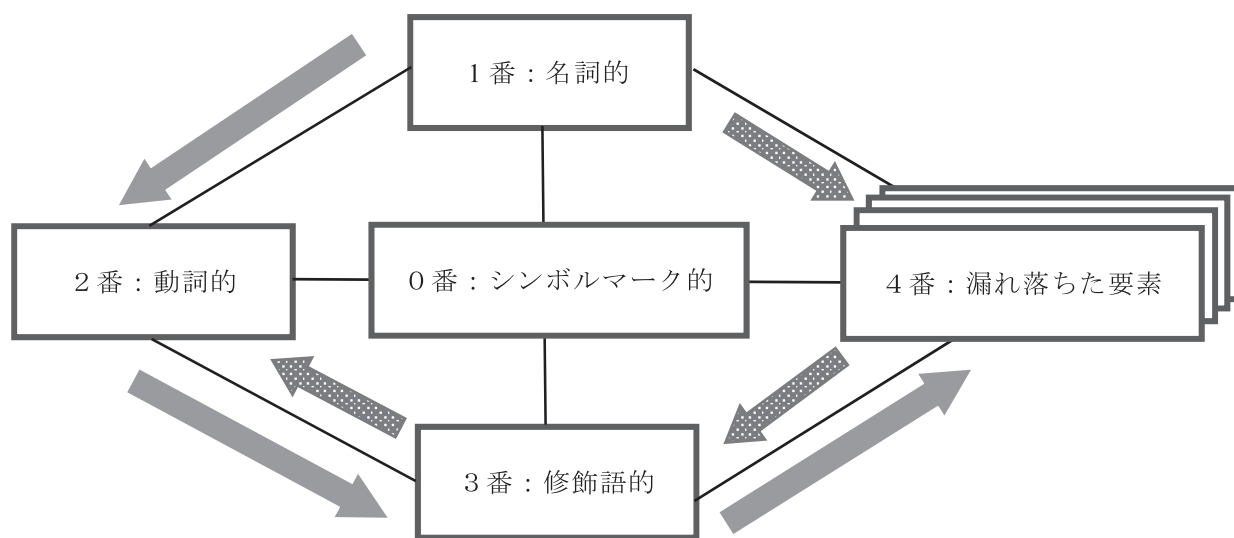


図 1. 04理論—意味の構造モデル (ダイヤモンドモデル)

(山浦靖男, 科学的な質的研究のための質的統合法 (KJ法) と考察法の理論と技術. 看護研究. 41 (1), 11-32. 2008.)

## 2) グループ編成

抽出したテキストデータの文脈の意味内容とシンボルマークを手掛かりに類似した内容を探し、さらに意味の全体感が似ているラベルを集め、ラベルと集まりの意味内容の類似性を研究者間で確認した。グループ編成は、中心となる類似点を採用し、その後は切り捨てていくといった作業を繰り返した。最終的に集めたラベルのグループ編成が、これ以上グループはできないと研究者全員が判断した4回まで繰り返した。最終的に8つのグループになったところで、グループ全体が訴える全体感から表現されている意味を研究

者全員で読み取り、了解した表現を表札として一文に綴った。なお、どのグループにも属さない残ったラベルも同様に表札として扱い、一文として表現した。

### 3) 表札の空間配置

学生が捉えたと看護チームで取り組む看護実践と複数患者受け持ちに関する看護課題を、残ったラベルと最終的な表札の相互関係を見つけ出すように空間配置をした。相互関係を見つけ出す際には、1つの表札とその内容となるラベルが記入されている紙を平面に広げ、研究者全員が配置を把握し、関係の意味を確認しながら構造化を行った。

## 3. 用語の操作的定義

看護課題：学生が看護学実習を通して、看護専門職として成長する自分自身の現在の問題や看護実践上必要であると自覚した内容を看護課題とする。

## 4. 倫理的配慮

学生の最終カンファレンス資料は、すべて学籍番号・氏名を削除し、データの匿名性を保持し分析した。また、成績への影響はないこと、参加は自由意志であることを書面にて説明した。研究協力は同意書の提出を以って同意を確認した。本研究は所属大学の生命倫理審査の承認（承認番号2728）を得ておこなった。

## 5. 統合実習の概要

統合実習を履修する学生は、領域別実習で学習の進め方、対象の理解、援助計画の立案・実施・評価、患者や指導者とのコミュニケーション、学生同士の連携などを体験している。学生は「看護管理の概要」を事前学習して実習に臨んだ。実習90時間（2単位）は、臨床の看護部門の協力を得て、学生が複数患者の受け持ちや看護チームの一員としての参加をおこなった。病棟の看護責任者、チームリーダー、看護スタッフのシャドウイングをおこない、複数患者（2名）の看護実践を指導者・教員の支援下でおこなった。詳細な内容を表2に示す。

表2. 実習目的・実習目標・実習の進め方

実習目的
既習実習の看護に関する知識・技術・態度の統合を図り、医療チームにおける看護専門職の役割と責任を自覚するとともに自己の看護観を深め、総合的看護実践能力を培う。
実習目標
1. 病院組織における看護部の役割、病棟看護師長（責任者）の役割を学び、看護管理の実際を理解する。
2. 看護チームにおけるリーダーの役割を学び、看護チームの一員としてのリーダーシップ・メンバーシップの重要性を理解する。
3. 複数患者の看護を受持つ学習を通して、多重課題時のケアの優先順位や時間配分を判断しケアが実施できる。
4. 受け持ち患者に必要な生活の援助技術、診療の補助技術を実施（または見学）し安心・安全・安楽・自立の視点から看護技術を提供できる。
5. 看護の専門性について考え、理論や文献を活用し看護観を深めるとともに自己の看護に関する課題を見出すことができる。

#### 実習の進め方

1. 実習初日に病院オリエンテーションを受け看護部の役割を理解する。
2. 病棟師長（責任者）の役割をシャドウイングして学ぶ。
3. 看護チームリーダーの役割をシャドウイングして学ぶ。
  - ・他職種との連携，調整
  - ・夜勤者からの引き継ぎ 夜勤者への申し送りによる看護の継続性
4. 2名以上の複数患者を受持ち多重課題時の看護の実際を学ぶ。
  - ・チームメンバーの役割理解
  - ・チームカンファレンスへの参加 情報共有 看護計画の評価修正
5. 生活援助技術のみならず診療の補助技術に浮いて事前学習し実践（または見学）する。
6. 実習最終日の学生カンファレンスでは，統合実習での学びや自己目標の達成度，残された今後の課題についてひとり一人，発表する。
7. 最終学内実習では，自己の看護観についてまとめる。

#### Ⅳ. 結果

##### 1. 学生が捉えた「看護課題」を看護チームで取り組む看護実践と複数患者受け持ちの看護の構造と空間配置

統合実習を終了し研究に同意した学生81名のレポートから，245のテキストデータを04理論にて抽出した。4回のグループ編成を繰り返して，表3に示すように，最終的に学生が捉えた看護チームで取り組む看護実践と複数患者受け持ちに関する看護課題について8つのグループのラベルと10のグループ表札を得られた。以下，4回目の抽出したグループの表札を〈 〉で，ラベルを【 】で示す。

表3. 学生が捉えた「看護課題」を看護チームで取り組む看護実践と複数患者受け持ちの看護のラベルとグループの表札

ラベル	グループの表札
臨機応変な看護	{C01} 臨機応変な対応するには，知識・技術・判断力を使って，事前の対策と変更での影響を調整することが必要である。
チーム連携によるより良い看護実践	{C02} 看護師個人の力量の向上と，チーム内の協力・連携が質の良い看護につながる。
	{C04} 多重課題の遂行のために各メンバーが主体的にチームに働きかけることで，チームワークが発揮され，メンバーの連携や協力により効率的なケアと問題解決が行われる。
チームでの患者の安全確保	{C03} 患者の安全を守る意識と根拠をもった看護，意識的な安全対策をチーム内で連携することが患者安全につながる。
優先順位や計画立案を行った上での看護実践	{C05} 目的や根拠のある計画立案は，具体的に行動が整理されるため，十分な観察と患者の安心につながり，余裕のある看護ができる。
	{C07} 整理された情報収集やチームワーク，優先順位を決めることで，効率的で余裕のある円滑な看護実践が行える。
看護師としての自己研鑽	{C06} 看護師には，安全・安楽で根拠のあるケアを実践する力と，より良い看護実践を行うためのアセスメント力を研鑽していく自覚と責任が求められている。
社会に求められる医療や看護	{C08} 社会に求められている安全・安心な医療・看護には，信頼関係を基盤にした医療チームの連携や協力が必要である。
タイムマネジメントをした上での看護実践	{C09} 限られた時間内に必要な看護を実践するには，優先度や自分の力量，患者の個性を考えた効率的に時間をマネジメントする必要がある。
質を確保した看護の公平性	{C10} 複数患者の受け持ちでも，重症度やケア量・効率に偏るのではなく，アセスメントによって個々に必要なケアを実践する。

学生が捉えた看護チームで取り組む看護実践と複数患者受け持ちの「看護課題」の8つのラベルは、【臨機応変な看護】【タイムマネジメントをした上での看護実践】【優先順位や計画立案を行った上での看護実践】【質を確保した看護の公平性】【チーム連携によるより良い看護実践】【チームでの患者の安全確保】【看護師としての自己研鑽】【社会に求められる医療や看護】であった。学生が捉えた「看護課題」を看護チームで取り組む看護実践と複数患者受け持ちの看護の構造と空間配置は、図2に示す。

学生は、看護師の実践を【臨機応変な看護】【タイムマネジメントをした上での看護実践】【優先順位や計画立案を行った上での看護実践】の3つが互いに影響していると捉え、それらの看護実践を【質を確保した看護の公平性】を保証していると捉えていた。この看護師の実践を【チーム連携によるより良い看護実践】により、チームの機能を発揮することで多重課題に対応できると捉えていた。また、【チームでの患者の安全確保】で患者安全を守ることに気づけていた。これらの看護実践を行うためには、日々の【看護師としての自己研鑽】が必要であると認識していた。看護師および看護専門職チームの看護実践は【社会に求められる医療や看護】に応える職務責任も捉えていた。

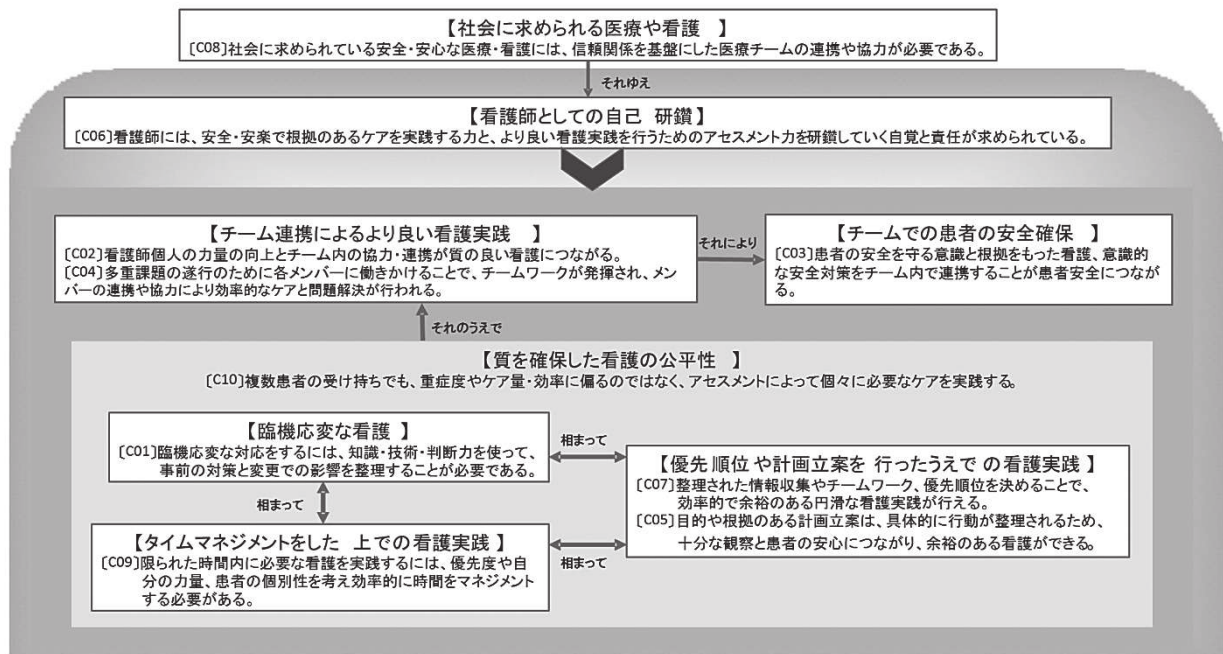


図2. 統合実習で学生が捉えた「看護課題」の構造

## 2. 複数患者受け持ちの看護実践における看護課題

動的な臨床現場で複数患者を受け持つには、【優先順位や計画立案を行った上での看護実践】を看護課題としていた。患者個人々のスケジュールを把握し、優先される検査や治療を中心にした〈整理された情報収集やチームワーク、優先順位を決めることで、効率的で余裕のある円滑な看護実践が行える〉と学んでいた。さらに、〈目的や根拠のある計画立案は、具体的に行動が整理されるため、十分な観察と患者の安心につながり、余裕のある看護ができる〉と患者に対しての看護の責任を見出していた。臨床の動的な状況を体験したことで、〈臨機応変な対応するには、知識・技術・判断力を使って、事前の対策と変更での影響を調整することが必要である〉と、対応に必要とされる看護師の能力について気づき【臨機応変な看護】ができる必要であると認識されていた。

学生は制限された時間内で患者に必要なとされる看護を実践するために【タイムマネジメントをした上で

の看護実践】を学んでいた。その看護課題には、〈限られた時間内に必要な看護を実践するには、優先度や自分の力量、患者の個性性を考え効率的に時間をマネジメントする必要がある〉と自分の限界を知り、タイムマネジメントをする際の手立てとすることを学んでいた。

【優先順位や計画立案を行った上での看護実践】、【臨機応変な看護】、【優先順位や計画立案を行った上での看護実践】の3つのラベルは、看護師個人の能力として相互に関連し、複数患者受け持ちに求められる看護実践のあり方を示している。複数患者の受け持ちをするには、〈複数患者の受け持ちでも、重症度やケア量・効率に偏るのではなく、アセスメントによって個々に必要なケアを実践する〉ことが求められ、【質を確保した看護の公平性】を守る責務を果たすための看護課題としていた。

### 3. 看護チームで取り組む看護実践における看護課題

学生は、複数受け持ちの実習のほかに、チームリーダーやメンバーのシャドウイングを行っている。看護チームをリーダーからの視点とメンバーからの視点の両方から学び、学生自身も複数受け持ちの実習で看護チームに身を置く体験をしている。その内容を踏まえて学生は、〈看護師個人の力量の向上と、チーム内の協力・連携が質の良い看護につながる〉と個人の能力とチームワークが看護の質につながっていく気づきを得た。また、〈多重課題の遂行のために各メンバーが主体的にチームに働きかけることで、チームワークが発揮され、メンバーの連携や協力により効率的なケアと問題解決が行われる〉ことで、看護チームにおけるメンバーシップに基づいた【チーム連携によるより良い看護実践】ができると課題を見出していた。

【チーム連携によるより良い看護実践】により、〈患者の安全を守る意識と根拠をもった看護、意識的な安全対策をチーム内で連携することが患者安全につながる〉といった患者安全は看護師個人で行うだけでなく、チーム全体で取り組む【チームでの患者の安全確保】の看護課題を得ていた。

### 4. 看護師として成長するための看護課題

学生が捉えた複数患者の受け持ちと看護チームで取り組む看護実践を遂行するためには、〈看護師には、安全・安楽で根拠のあるケアを実践する力と、より良い看護実践を行うためのアセスメント力を研鑽していく自覚と責任が求められている〉と看護課題を認識していた。学生は、看護師として成長していく覚悟をもって【看護師としての自己研鑽】が必要であると述べている。看護師としての自覚や責任を看護課題とした根拠には、〈社会に求められている安全・安心な医療・看護には、信頼関係を基盤にした医療チームの連携や協力が必要である〉という社会的な役割の重さ【社会に求められる医療や看護】を感じとっていた。

## V. 考察

【優先順位や計画立案を行った上での看護実践】のグループ表札である〈整理された情報収集やチームワーク、優先順位を決めることで、効率的で余裕のある円滑な看護実践が行える〉と〈目的や根拠のある計画立案は、具体的に行動が整理されるため、十分な観察と患者の安心につながり、余裕のある看護ができる〉は、複数患者受け持ち時に、学生が実際に実施したことで得られた看護課題と捉えられる。優先順位の決定や計画立案は、領域別実習から学習してきた内容であり、患者が複数になっても応用されていたと推測できる。2名の受け持ち患者の行動計画を比較できる記録用紙も、客観的に優先順位や時間調整を



考える手助けになったと考える。

一方、【臨機応変な看護】と【タイムマネジメントをした上での看護実践】は、〈臨機応変な対応するには、知識・技術・判断力を使って、事前の対策と変更での影響を調整することが必要である〉〈限られた時間内に必要な看護を実践するには、優先度や自分の力量、患者の個性を考え効率的に時間をマネジメントする必要がある〉と、実践の振り返りから得られた看護課題と読み取れる。複数患者に対する行動計画を急に変更することは、統合実習で初めて体験する学習である。臨機応変な対応をするためには、その場の対応のみでなく、行動の結果を予測することで行動の方向性の決定が求められる。また、限られた時間内で、複数患者の情報収集、行動調整、援助の実施、実施後の結果の報告（情報共有）をバランス良く実践することも、学生には初めての体験となる。別所は、統合実習での学びで最も記録単位数が多かったタイムマネジメントを、総合実習（本研究の統合実習と同意）で初めて複数患者や短時間での情報収集の仕方を学ぶのではなく、科目別実習（本研究の領域別実習と同意）の時から意図的な情報収集の仕方、また科目別実習に出るまでの講義においても、看護過程の演習やシミュレーション教育の演習などからも、どのように情報収集をすればよいかトレーニングの積み重ねを考える必要がある<sup>11)</sup>と述べているように、意図的な情報収集を学習する方略が求められる。

【質を確保した看護の公平性】は、一人の看護師の看護実践が〈複数患者の受け持ちでも、重症度やケア量・効率に偏るのではなく、アセスメントによって個々に必要なケアを実践する〉とあり、学生の記述では「決められたケアに精一杯になり、対象に合った必要なケアを考えられなかった」「ケアの重要度によって接する頻度が違っても、看護する上ではどちらかに偏ることの無いよう、ケア中で観察する点は見落とさないようにすることが必要である」と2人の患者のうち一人に偏った時間を費やした体験から振り返りを行い、一人ひとりの患者を尊重する看護の基本的な姿勢を忘れてはいなかった。

【チーム連携によるより良い看護実践】は、看護師個人の限界を自覚することと、チームの機能の可能性を知ることが、チームへのコミットメントにつながると考えられる。看護チームにコミットメントすることで、メンバー同士の相互作用を促し、互いの強みや弱みを補完し合いながら、チームメンバー個人の総和では実現できない成果を生み出すことが、より良い看護につながると考えられる。看護師個人では解決できない多重課題に関する問題もチームに戻すことで、協力や連携により問題解決が促進される。ただし、看護師個人の看護実践能力を向上する姿勢が前提条件として挙げられる。学生が領域別実習で体験した実習グループメンバーとしての協力・連携の体験が「グループでの円滑な実習」を目的とし、実習中の各学生の行動計画が遂行されることと学生カンファレンスでの学びの助け合いが包含されている。統合実習でのチームで行動する看護実践は、「患者の健康問題の目標達成に向けた実践」に目的が変更されているが、チームワークの効果の認識を基にして、看護チームのチームワークの重要性を認識されたと推測できる。

加えて、【チームでの患者の安全確保】は、看護師個人の看護実践の限界を補い、患者の安全対策をメンバー全員の共通認識により確保できると看護チームで取り組む看護実践の看護課題を見出していた。領域実習中より、申し送りでのインシデント報告にも注目し、看護チームでの対策に学生も参加できるように促しが求められる。

【看護師としての自己研鑽】の学生の記述には、「常に学ぶ姿勢を大切にし、疑問に感じたことや分からないことは、自分が納得いくまで調べ、正しい知識を身に付けられるようにする」「自分の課題を克服することで、質の高い看護が提供できるようする」と看護師として成長するために自分の課題を乗り越え、継

統的な学習が必要だと述べている。これは、統合実習に限定した看護課題ではないが、複数患者を受け持つことで、質の高い看護を遂行するには、患者の人数分の知識と変更が生じた際に対応できる知識が必要であると強く認識をしたと考える。また、限られた時間内で計画的な援助の実施を求められた体験から、正確でスムーズな援助技術が看護師には必要であると看護課題を捉えたと考える。

医療を必要とする人は、安全で安心できる治療や看護を求めている。【社会に求められる医療や看護】には、安全・安心を患者に提供するためにチームワークの良い医療チームが求められている。学生は、医療チームの一員として看護が果たす役割を統合実習より学んでいた。この看護課題には、病院の看護部長の講話や病棟責任者のシャドウィングが多分に影響していると考える。【社会に求められる医療や看護】の看護課題は、看護管理実習と組み合わせた統合実習ならではの学びと捉えた。

## VI. 本研究の限界と課題

本校の統合実習では、看護管理者である看護部長の講話、病棟責任者の師長・チームリーダー・メンバーのシャドウィング、複数患者の受け持ちをオリエンテーションとまとめの日を含めた2週間で行っている。そのため、複数患者を受け持つ実習が慣れてきた頃に終了する少ない日数での学びとなっている。また、学生の最終カンファレンス資料から学生の純粹体験を読み取るため、データを04理論にて抽出したが、記述されていない学びも存在すると考える。

今後の課題は、本研究で得た知見を、統合実習に至るまでの講義・演習にて、看護実践能力育成につながる授業方略を構築することである。また、短期間の統合実習であっても看護課題を見出せる体験ができる実習内容の検討である。さらに、統合実習を体験した新卒の看護師に対して追跡調査を行い、その効果を実証する必要がある。

## VII. 結論

1. 学生が捉えた複数患者の受け持ちと看護チームで取り組む看護実践での看護課題は、【臨機応変な看護】【タイムマネジメントをした上での看護実践】【優先順位や計画立案を行った上での看護実践】【質を確保した看護の公平性】【チーム連携によるより良い看護実践】【チームでの患者の安全確保】【看護師としての自己研鑽】【社会に求められる医療や看護】の8つであった。
2. 複数患者受け持ちでの【優先順位や計画立案を行った上での看護実践】は、領域別実習での学びの延長線上にあり、応用の可能性を含んでいる。
3. 【臨機応変な看護】と【タイムマネジメントをした上での看護実践】は、看護基礎教育の学生にとって困難な能力であり、実践の振り返りにより看護課題を得られる。【タイムマネジメントをした上での看護実践】を実践可能に近づけるため、意図的な情報収集を行う授業方略を、講義・演習・領域別実習から組み込む必要がある。
4. 【チーム連携によるより良い看護実践】は、領域別実習でのグループ間の円滑なメンバーシップを促すことで、看護チームにおける看護実践へとつながる。
5. 領域別実習から学生自身が限界を知覚し、必要時応援を求める姿勢を促すこと、申し送りのインシデント報告やその対策について注目できるように指導することで【チームでの患者の安全確保】につながる。
6. 【社会に求められる医療や看護】の学びを得るには、看護管理実習と組み合わせた統合実習が有効である。

## 引用文献・参考文献

- 1) 厚生労働省：「看護教育の内容と方法に関する検討会」報告書，厚生労働省ホームページ，<http://www.mhlw.go.jp/s.tf/shingi/2r9852000001vb6s-art/2r9852000001vbiu.pdf> (2016.11.21 23:00 アクセス)
- 2) 日本看護協会，広報部：「2016年 病院看護実態調査」結果速報，ニュースリリース，[http://www.nurse.or.jp/up\\_pdf/20170404155837\\_f.pdf](http://www.nurse.or.jp/up_pdf/20170404155837_f.pdf) (2017.11.26 20:00アクセス)。
- 3) 厚生労働省：「新人看護職員の臨床実践能力の向上に関する検討会」報告書，厚生労働省ホームページ，<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2004/03/s0310-6.html> (2017.11.26 22:30アクセス)
- 4) 厚生労働省：「看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会」報告書，厚生労働省ホームページ，<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2003/03/s0317-4.html> (2016.11.21 23:00 アクセス)
- 5) 高山奈美，竹尾恵子 (2009) 看護活動におけるチームワークとその関連要因の構造. 国立看護大学校研究紀要. 8 (1), 1-9.
- 6) 井村香織，小笠原知枝，林 智子ほか (2013) 看護師の目的達成行動に対する情動知能とチームワークの影響. 三重看護学誌. 15 (1), 37-41.
- 7) 川西美佐，眞崎直子，山村美枝ほか (2012) 新人看護師が困難になる多重課題場面，看護管理者の調査から. 日本赤十字広島看護大学紀要. 12, 89-95.
- 8) 正木治恵 (2008) 看護学研究における質的統合法 (KJ法) の位置づけと学問的価値. 看護研究. 41 (1), 3-10.
- 9) 山浦靖男 (2008) 科学的な質的研究のための質的統合法 (KJ法) と考察法の理論と技術. 看護研究. 41 (1), 11-32.
- 10) 山浦靖男 (2008) 科学的な質的研究のための質的統合法 (KJ法) と考察法の理論と技術. 看護研究. 41 (1), 11-32.
- 11) 別所史恵，石橋鮎美，坂根加奈子ほか (2012) 複数患者を受け持つ総合実習における看護学生の学び. 島根県立大学出雲キャンパス紀要. 7, 59-69.